京都大学新聞
学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
(761)2054 直通
(751)2111 (内線2571)
振替・京都3909
(1部30円 1年間1,000円)
寺町通今出川上ル
TEL (231)1506 (231)2257 (231)1177 (231)5518

狭山差別裁判再開公判
11月20日に予定

七月二十三日、午後二時から奈良地裁において一橋のない川第2部上映阻止闘争弾圧裁判（第十三回公判）闘争が行なわれ、部落解放同盟奈良県連青年部を中心に京都府連、大阪府連および、高校・学生部委員会、社青同奈良地本の労働者など、約二百人が結集した。

この日の公判は、六月十八日の冒頭陳述に続き、その内容を具体的に明らかにしていく闘いの第一回目として、米田奈良県連委員長が「証人」として出廷した。またこの公判から、はじめて中央本部がこの公判闘争を指導し取り組み、「近畿ブロックの統一行動として、矢田教育差別事件公判闘争」として、米田奈良県連委員長を中心とする「証人」の組織化がはかられ、その基盤に「一橋のない川」という名を冠され、一生身分を固定化されたわれわれの先祖の「エタ」という名を冠され、一生身分を固定化されたわれわれの先祖は、絶対不当弾圧裁判闘争と共に、狭山闘争へ結びつける闘いとして闘い抜く」事が、「西岡中央から提起された。

証言に立った米田書記長は、次のように部落差別の歴史と現実、水平社以来の差別糾弾闘争の重要性を説くと共に、今なお差別を続ける行政―裁判所を鋭く糾弾した。

――徳川幕府の成立後、その幕藩体制存続の手段として、主要な生産を担う百姓の抵抗を押さえる手段として身分制が創られ、その基底層に「清潔酔は汚ちを受け」、「エタ」と呼ばれたのがわれわれの先祖である。

明治に入り四民平等・解放令が出されて、「エタ・非人」の名称は、会同令により廃止されるとされたが、実際は、貧困で搾取をうける農民に経済外的強制を強いる、その分配の過程に現われた。十藤工商は知らず知らずの間に下層を搾取することにより自分の不満を抑えようとした。『エタ・非人』の生活は衣服・居住地・建造物（つぼ）見して身分がわかるように行われ、マケは結ってはならず、下駄は履かず、七人の命は『エタ』なんと言われ、撲刀がし巻りに差別を奨励していった。

「みじめな生活」は発する部落民の不平に対し政府は明治元年、有力者を抱びし部落の生活改善運動を組織した。これは、現在の悲惨な生活を強いているのは先祖であるとし、本願寺などの宗教・不平を向けていった。こうした和運動は一個人としての価値をにげ、身分を固定化する「エタ・非人」の名称を撤廃させていった。

資本力で破壊され、貧困者が増加していった。この頃の時の内務省が「特殊部落」という新たな蔑称を撤廃させていった。

「裁判闘争」、「解放同盟」、「部落解放運動」、「部落解放」、「部落解放運動」、「部落解放」、「部落解放」、「部落解放

全学連大会開く

学生運動の階級的統一目指し

全学連（北条委員長）第9回定期全国大会は、七月十五日から十八日東京で四日間、東大教養と神奈川大学において、全国の闘う学生約六百名の結集をもって庄倒的に勝ちとられた。

今大会は、早稲田解放闘争の真只中から、そして、その成果を踏えつつ七十年代学生運動の断殺的統一と革命的再編に向けた諸課題を確定するものとしてかちとられた。

大会第一日目（十五日）は、機動隊による早朝からの東大教養の包囲、そして本共同幸マル派による四回の会場への撤去攻撃という敵対を粉砕しつつ行われた。

さらに、十六、十七日の予定会場であった明治大学駿河台会館が試験にもかかわらず、当日のみ強事だによるロックアウトが行われるという敵対によって会場確保の闘いとなった。

この日は、全学連中執からの任務規定、東大教養、早大の学生からの決議表明を受けさらに、革労協学生委員会から調査、七〇年代学生運動の任務」、七〇年代戦線の再見直民党から『解放』誌上で続いて全体討論がもたれた。

第二日目は、全学連中執から情勢、戦術の提起を受けて、各ブロックからの報告がなされ、さらに社青同中央本部・樋口委員長より連帯のあいさつをうけた。

第三日は、ブロック報告の続きを行なった後、自由討論さらに議案提案、新執行部の選出がなされ、この後、第二五期中央執委員長代表として再選された北条委員長からの決意表明がなされた。

さらに、大会決議として、10・21国際反戦闘争への総結集、早大解放闘争の更なる飛躍、そして、来年の参議院選において70年代戦線の高見吉司氏を支持・連帯して闘う、という三項の決議をかちとった。

最終日は、十五の分科会が三系統に分かれて行なわれ、全分科会討論を経た後全体集会をもち、分科会の成果の報告・交流がなされた。

そして新中執より、七・一九小選挙区制粉砕、就政・新大管法攻撃粉砕・文教委員会粉砕闘争、反人民的憲法改悪の矢兵粉砕闘争、日教組ストと連帯して闘おうという提起が全体で確認された。

最後には、議長団より大会の総約がなされ、シュプレヒコール、インターの斉唱をもって四日間にわたる第二五回大会を終えた。

この問題は、「頭脳の補利」主張がいかなる意味をもっているのか、という前の、共同行動の原則上の問題があり、とりわけ、『解放』誌上で、「中国」で批判してもらいたい、と言った。

全国集会の報告の中では、アムソン社から「分断の結果として『解放』誌上で、「中国」という「青い芝」の生涯に対して、「『解放者』との連帯」を対置したものである。

その他、京都女性解放研からは歩道橋にも見られる風俗先社会への批判、大手前高（定）「関書者」解放研からは、主に『解放者』の問題として、『青い芝』への批判を展開した。

これは、「『関書者』はじき出しをしよう」「『解放者』幻想を打ちくだこう」「来年、裁判を許さない」という「青い芝」の生涯に対して、「『解放者』との連帯」を対置した。

その他、京都女性解放研からは歩道橋にも見られる風俗先社会への批判、大手前高（定）「関書者」解放研からは、女であることとともに、共同行動をさえ拒絶している他の部分に対する反原則的な誹謗文が発表され（「頭脳の補利」主張は「障害者」論刊につながる、と言うのは力ルック的であり、生産の家的思想である等々）、そのことをめぐって、第四インターの基調を受けている、と主張する関西婦人会議に対して、批判が集中した。

この問題は、「頭脳の補利」主張が、「障害者」解放闘争の成果を踏まえて、「障害者」論刊に対する反原則的な誹謗文が発表され（「頭脳の補利」主張は「障害者」論刊につながる、と言うのは力ルック的であり、生産の家的思想である等々）、そのことをめぐって、第四インターの基調を受けている、と主張する関西婦人会議に対して、批判が集中した。

この問題は、「頭脳の補利」主張が、「障害者」解放闘争の成果を踏まえて、「障害者」論刊に対する反原則的な誹謗文が発表され（「頭脳の補利」主張は「障害者」論刊につながる、と言うのは力ルック的であり、生産の家的思想である等々）、そのことをめぐって、第四インターの基調を受けている、と主張する関西婦人会議に対して、批判が集中した。

優生保護法改悪阻止へ

7・15全関西集会で激烈な論争

七月十五日大阪において、全関西集会が開かれたので、約一三百名西の各住宅解放戦線、「障害者」解放戦線を結集して、六・三〇、七・一の二日間にわたって東京で開かれた「優生保護法改悪阻止全国討論集会」の報告集会が開かれた。

この集会は、六月十日の京都における全関西共同行動の成果をうけて、関西における、優生保護法改悪阻止に向けた個別的機関を見に到りインターの機関紙に載った。

発言は、それぞれ、六・三〇、七・一の全国集会での成果を踏まえ、胎は女の権利であるか、否かについて激烈な論がくりひろげられた。とりわけ、この集会の直前に到りインターの機関紙に載った、「胎児の権利」主張は、「障害者」解放闘争の成果を踏まえ